

第 30 回 市長と学長との懇談会

日 時：平成 30 年 11 月 16 日（金）15 時 30 分～17 時 30 分

場 所：神戸市外国語大学「三木記念会館」

1. 外国人留学生の戦略的獲得と定着

（久元市長）

今、臨時国会では、外国人材の受け入れ拡大に関して大変激しい議論が行われているが、我が国がグローバル社会の中で名誉ある地位を占めていくためには、いろいろな形で優れた人材を呼び寄せていく、そしてこの神戸を含めて、我が国に来られた特に若い世代の皆さんが気持ちよく暮らしていただけるような環境づくりが重要である。大学等もそのステージであり、神戸の地域社会がそれに即応した形になっていうことも大変重要である。

神戸市政としても、例えばスタートアップ人材の呼び込み・育成に取り組んでいるが、大学等との関連では、優れた人材を留学生として招いていくということが大変重要である。

（神戸大学）

本学では現在、いわゆる正規の留学生が1,300人、加えて短期留学の学生を350人ほど受け入れている。数的には多い感じはするが、大学院生も入れた1万6,000人に対しては10%を超えていない状況で、国際的な大学とは言えないと言われているため、留学生を増やそうとしている。

組織的な取り組みの1つとして、オックスフォード大学と協定を結び、日本語学科の学生を、2年生の段階で1年間受け入れている。必修科目であるため神戸大学文学部で1年間過ごさないと卒業できない。6年目に入っているが、非常に評判が良い。あとはジョージア工科大学や、南カリフォルニア大学は短期留学であるが、神戸大学に来て何週間か講義を受ける形もとっている。

また、留学生獲得のための情報発信の場として、海外拠点で7か所持っている。国ごとに留学生フェアなどが行われる際には、神戸という名称は非常にブランド力があり、神戸大学のブースは、いつもいっぱいになっていると聞いている。

受入れ体制での課題は、やはり宿舍が不足していることだ。神戸大学全体で留学生対応の宿舍が、250～300ほどあるが、留学生を現在の1,300人から1,500～2,000人ほどに増やそうとすると、絶対量が足りない。

短期留学生の増加に伴い、寮を改造し、深江のキャンパスに48ほど受け入れ施設を整備した。将来的には、キャパシティを増やしたいので、財政面等も含めて検討している。

留学生の獲得には地道な活動が必要だと感じている。

(兵庫県立大学)

本学は、留学生を増やすということを組織的に考え、来年4月から国際商経学部を新設する。この中のグローバルビジネスコースは、定員80人で留学生と日本人が半々で入る。英語の講義で所要単位を満たすため、必ずしも日本語が話せなくても本学の学士号を取って卒業できる。

現在キャンパス内に国際学生寮を建設中であり、留学生には、日本語や日本の文化を最初によく知ってもらう必要があるため、グローバルビジネスコースの留学生と日本人学生は、1年間必ず寮に入るということを義務づけている。部屋数に余裕を持たせているので、違う学科・学部で来る学生も入寮できるようにしたいと考えている。留学生は外国の教育サイクルに合わせて9月に入学するが、日本人学生は4月入学のため、最初の半年、1年生は日本人だけとなるが、その期間に必ず海外研修に行くことを義務づけている。後半は留学生だけとなるため、そこで、日本語、日本文化を勉強してもらう。

国際学生寮の1階部分は、国際交流センターの機能を持たせ、地域の住民の方とも交流できるようにしたい。

2年生以降は一部を除いて寮から出ることとしており、日本のコミュニティの中に入れてもらう。住む場所については、大学が手厚く措置する予定である。

外国で高校を卒業した日本語を話せない学生に入学してもらう仕組みのため、入試は海外で行う。各国の教育省や日本の大使館といった、公式な機関を通じて優秀な高校を推薦してもらい、レベルが達している高校は指定校的にして、本学から教員が赴き試験を行う。

A S E A N地域は日本留学に魅力を感じており、日本企業への就職を希望する学生も多いため、そのあたりを中心に、オーストラリアやヨーロッパ、アメリカにも募集し、20か国程度からの入学を想定して動いている。

優秀な留学生の獲得には、グローバルビジネスコースに入るメリットを示す必要がある。地元の産業界、企業に理解していただくため、兵庫県を中心に90社ぐらい回り、留学生のインターンシップの受け入れや、卒業時にマッチングすれば就職を考えてもらえるかなどについてお願いしており、概ね反応は良い。また、生活の支援や奨学金のお願いもしている。企業からは、日本語能力が必要だと言われているため、これに対応し日本語教育をしっかりしていきたい。

(神戸学院大学)

私立大学としては全くそういう状況に至っていない。おそらく各私立大学も留学生の受け入れ方針は持っているだろうが、ボリューム感にはつながっていないので、いろいろと進めていくうえでの障害を乗り越えるために、神戸市とも一緒にやっているとありがたい。

本学の留学生は130人余りで、ようやく学生数の1%を超えてきた。3年前にできたグローバルコミュニケーション学部の中に、外国人留学生向けの日本語コースがあり、そこだけで100人超で、ほかの学部での留学生の受け入れが進んでいない。各大学も悩んでおられると思うが、それが逆に伸びしろではないかと考えている。

昨年、8月9月にロシアのニジニノブゴロド国立言語大学からインターンシップ生を受け入れているが、ロシアには日本に関心を持ち、日本語の勉強をしている学生が非常に多いとい

うことがわかってきた。短期研修であっても、一旦、神戸へ来てもらおうと、日本で過ごすうえで環境的にも良く、住みやすい、東京には遊びに行く機会があれば良いという感覚になってくれている。

大学入学時に若者から選ばれるまちになっていくためには、神戸市内の20数校と行政とが一緒になって、国際都市、留学生が集うまちというイメージと実態をつくっていくべきだと思っている。出口の部分では、地元産業界とも一緒になって取り組んでいけるテーマである。

神戸市で、各大学の持つプログラムをある程度集約し、観光ともあわせて情報発信する仕組みをつくっていただけると非常にありがたい。

住まいの件については、本学の場合、今は借り上げという形で対応している。関西国際大学さんが、県営住宅の空き室を留学生向けシェアハウスという形で貸し出しているそうであるが、そういった施設が安価で提供されると、留学生に対しても誘致がしやすくなる。

また、現在、検討されている大学交流拠点の中に、留学生同士の交流の場、日本の学生にとってもいろんな留学生に会える場、情報交換の場になるというようなコンセプトも含められないか。日本に愛着を持ち就職したいという留学生たちを企業と結びつける機能も果たしていただければありがたい。

差しあたり、そういったところがある程度パッケージとして提示できる形になると、より一層、留学生の誘致という点では力強くなってくると感じている。

(甲南大学)

各大学で専門性もカリキュラムも違うため、神戸市で各大学の強みを束ねていただき、まとめて打ち出せば、留学生にとっても分かりやすく学びの選択は広がるはずだ。そこで一緒に神戸の魅力も伝えていくと効果は高いのではないかと。市と大学が一緒になって協力するということが必要だ。

留学生の寮も各大学で設置するとコストがかかるので、市と大学が連携することによって、一つの寮にいろんな学生が入れるようにして、それを拠点的に設けていくと、住居環境も見通しがたちやすくなる。神戸の暮らしが良かったと思ってもらわなければ、就職してもらえないし、本国に帰った留学生がまた日本に戻ってこようかという長期的な循環につながらない。

(久元市長)

市内の大学情報をまとめて海外に発信するという話が出た。一番簡単なのは、英語などの多言語ウェブサイトをつくり、市内大学の紹介、留学したい方向けの連絡先の案内、既存の英語などのページへのリンク、神戸の魅力発信、などを行うことが想定される。市がコーディネーター役となり制作するということも考えられるが、ご意見を伺いたい。

(甲南大学)

それも一つだが、例えば個々の大学が留学生獲得のために、海外の留学生フェアに、神戸の大学何校かがまとまって参加し、神戸市と連携し、神戸の住み易さも含めて、海外でアピール

するということができば、現地に対するインパクトが強いのではないか。

(久元市長)

次に、留学生の住宅をどう考えるのかについてもご意見が出たが、留学生だけの留学生会館のようなものを好むのか、日本人学生と一緒に住んでも構わないのか、ご意見を伺いたい。現在、極めて数は少ないが、市営住宅や公社の賃貸住宅を学生の皆さんがシェアできるよう、リフォームをして入居してもらおうという取り組みをしているが、このような取り組みをさらに広げ、留学生を対象にすれば一緒に入ってもらえるのか。

(神戸大学)

留学生の固まりをつくると文化的にも交わらないし、やり方としては絶対だめだとよく言われている。これは、ヨーロッパなどでも同じで、ある一定のコミュニティが同じ国で固まってしまうと、いろんな問題が起きてしまう。地元との交流という意味でも、いわゆる混住をしてもらい、できるだけ多様な混じり方をさせたほうが良い。

(兵庫県立大学)

本学の学生寮も、ワンユニットに個室が4つで、キッチンなどは共同である。原則、留学生と日本人を2人ずつ混住させる。多文化共生の空間を生活の場からつくっていくのが非常に重要だろう。

(久元市長)

宿舎の問題は、留学生に固有の問題というよりも、日本人学生との混住の仕組みの問題に対して、もっと力を入れていかなければいけないと考えている。

(岡口副市長)

留学生に限ってという形ではないが、学生の住まいに関する鶴甲団地の取り組みを広げていくための検討を進めている。ただ、市街地の市営住宅の提供は難しく、優先的に検討しているのは市街地の外の市営住宅が中心になってるのが事実だ。我々としても学生の意向をつかみたいと思っているので、ぜひご協力いただきたい。

(久元市長)

空き家対策も非常に重要な問題で、空き家のルームシェアができるのかどうかは所有者との関係が問題となるが、これも少し挑戦をしていきたいと思っている。

(流通科学大学)

本学には560名ほど留学生がおり、これまで学生募集の一環として留学生をとってきた経緯がある。今年の春に学生寮192室を開設し、8室のユニットに半々ぐらいで留学生と日本人学

生が住んでいる。ただ、今の在籍者に対しては全く数が足りていない。

日本人学生が外国人学生のふるさとに訪問したり、留学生の母国語の教室を自分たちで運用したり、料理をつくってお互いに食べるなど、さまざまな動きがあり、ダイバーシティという点では非常にいい結果が出ている。留学生は市街地で住みたいという希望が強いため、上位の学年になると、おそらく引越すと思われるが、その前にこのような体験をさせておくことは、教育の一環としては非常に意味があると感じている。

(神戸情報大学院大学)

本学は在籍定員110名の小さな大学院だが、在籍生の半分以上がアフリカを中心に中東や中国以外のアジア諸国からの留学生である。インターナショナルな留学生は、私たちの想定とは違う部分で望んでいることがあるので、種々の施策を検討する際にそうした点を考慮いただきたい。例えば、途上国学生の多くは大家族文化の国から来るため、1人暮らしを好まないことが多い。以前そうした学生に民間住宅を紹介した際は、全員が一人部屋でなく2人以上のルームシェアを選択したことがあった。また、途上国から来る学生の多くは電車などによる通学の経験がないため、日本人には不便でない距離の場所にある寮でも電車通学のため敬遠する傾向がある。本学は幸いにもJASSOの兵庫留学生会館が近くにあるため、そこに多数の学生が入っている。兵庫留学生会館には幅広い多様性があり、彼らは非常に共感を持つことができた。受入にあたっては、本当の意味での多様性の実現がとても重要だと考える。

帰国後のフォローアップの点でも、日本での在学中に相互ネットワークができると、こちらからの働きかけが無くとも、学生間で自立的に動き出すため、学生同士のインターナショナルな交流ができる場所を市でつくっていただけると非常にありがたい。

途上国から来た学生にとって、大都市の利便性も魅力だが、一方で人間的なふれあいも求めている。神戸にはその両方があるため、東京などとも十分競合できるだけの魅力となりうる。その意味で、神戸の一番の魅力はインターナショナルなホスピタリティだと考える。ただ、こうした点は来日前の学生に十分伝わっているとは言えず、こうした点を海外に対してしっかりと発信していただくことが、海外留学生の受入れ増加につながるのではないかと考える。

(久元市長)

神戸の情報発信に関しては、いろんな施策について当てはまることだが、神戸の施策・事業は、なかなか知られていない、発信手段がまだまだ十分ではないので、これはぜひ神戸市として考えていきたい。

次に、就職の問題についてご意見があれば伺いたい。

(神戸大学)

卒業後、日本で働きたい留学生は潜在的にかなりいると思う。

日本型の就職活動に慣れない留学生は結構いる。例えば、台湾は、基本的に4年生卒業してから就職活動をするという社会的な風土があり、日本のように3年生の後半から浮き足立つよ

うなことはないと聞いている。4年間きっちり勉強して、それを見てもらいたいという希望があるようだ。そこと今の就職活動の仕組みが少し合っていないのではないか。

大学としては、そのあたりのケアもしつつ、就職フェアなどを行っている。神戸で就職したいという留学生のニーズは多いと思っているが、やはり東京、大阪を向いてる学生もそれなりにいる。神戸の中の魅力を、もう少し大学でも伝えていかなければならないし、企業も努力していただかなければならない。

(流通科学大学)

本学は、毎年100名以上の留学生を就職させているが、優秀な層ほど、母国語、英語、日本語が話せるため、すぐにアメリカやカナダに行ってしまう。本国に帰って起業したいという国民性の国もある。それらを除いた日本での就職を希望する留学生については、日本人の学生がこれだけ良い状況にある中でも、やはり厳しいというのが現状だ。日本の就職の仕組みになじめない学生がたくさんいる。また、留学生は本国で聞いたことのあるような名前の企業でないと就職したがる。

本学では2年前から、みなと銀行と留学生を採りたい企業と学生とのマッチングのイベントを開催してきた。しかしそれほどの効果が出ていない。マッチング1回では、有名な会社でなければ行きたくないというハードルを越えないようだ。学生と企業で、もっと長い経験をする必要があって、企業の特質、学生の特質、その国の国民性などをお互いによく理解していく必要があるのだろうというのが結論だ。しかし、これを単体の大学で運用していくのは非常に厳しいため、ぜひ行政に音頭を取っていただき、複数の大学と、産官学で、仕組みをつくっていただけると良いというのが、この数年の経験で感じたところだ。

これまで意見が出たように、交流施設のようなものがあれば、そこに企業と留学生が集まり、いわゆるインターンではなく、一定期間、共通の体験をしていくプログラムができれば良いのではないか。場所についてもお互いに交通の便のいいところで、そのあたりがうまく解消できるような仕組みがあると良い。

(神戸学院大学)

交流拠点ができるとすれば、そういった機能を果たすような形にしていだきたい。留学生に対して関心を持っている企業、日本の企業、地元の企業への就職に関心を持つる学生が、恒常的に情報に接する、あるいは人的にも接するような仕組みができると、大分変わってくる。

日本人学生の場合も同じことが言えるが、1回きりの面接ではなく、ある程度接して、企業の側も留学生の性格や行動、思考がわかってくると、アプローチもしやすくなるし、留学生も、関心を持ってきている企業の情報があると、また見学に行ったり、インターンシップを組んでもらい参加する機会が増えてくるのではないか。そういった場合は、大学間でつくるのは難しいので、行政でつくっていただけると非常にありがたい。

(兵庫県立大学)

交通の便が良い場所に交流拠点があるというのは非常に重要だ。三宮は、どこの大学からもちょうど中心ぐらいで行きやすいので、留学生や日本人学生だけでなく、産業界も拠点を活用して、企業の人材育成、リカレント教育などに使える。学園都市はユニティでの単位互換制度が一定の役割を果たしているが、神戸の中心地の拠点で神戸市全体で受けられるようにするということが非常に重要ではないか。

留学生の採用について企業に話を聞くと、最近は通年採用なので、9月卒業の留学生でも、あらかじめ採用しておいて、4月に入ってくる日本人と一緒に社員教育をする方法で十分やっつけていけるようだ。また、留学生用の合同企業説明会では、ブースにいっぱい留学生が来てくれるが、日本語検定2級という条件を出した途端にいなくなったという話もあり、日本語というのを重視してる企業もある。しかし、中には英語で入れる企業もあり様々なので、そのような情報交換も、産学官でできれば良いのではないかと思う。

(神戸国際大学)

昨年度、本学を卒業した学生の約半数が日本で就職しており、うち神戸市内の企業に就職した人は就職者全体の8%程度。かなり少ない状況だ。

企業そのものが神戸よりも大阪にたくさんあるということもあるが、神戸市は中小企業が多いという点で、PRの問題があると思う。特に2021年卒業から就活ルールが変わり、ますます就職活動やインターンシップが早期化すると言われていたが、中小企業はそのあたりのノウハウの蓄積が少ないので、これまでの議論で出た拠点などで、企業と大学を交えた形で実際に話し合ったり、そこに学生が来て、就職活動や意見交換ができるようにしていただければと考えている。本学では、在学生在が就職した学生の話聞ける機会を毎年設けている。そういったものも市全体に広げることができれば良い。

昨日まで潮州で学生の面接をしていたが、なぜ本学に来たいのか、神戸をどれぐらい知っているかと聞くと、あまり知らなかった。来たい理由を聞くと、先輩が行っているからとか、SNSの情報を見てということであった。留学生間ではSNS上でいろんな情報が飛び交っているので、SNSを上手く活用すれば情報発信できるのではないか。

(久元市長)

就職者の8%しか神戸に就職しないというのは相当問題がある。多角的に、よく要因を分析してみたい。

(神戸山手大学)

本学には留学生が200人ほどいるが、留学生の就職について、大学コンソーシアムひょうご神戸さんのお力を借り、神戸国際大学さんと、神戸親和女子大学さん、流通科学大学さん、神戸山手大学で、インターンシップイベントをさせていただいている。兵庫国際交流会館で、企業を集めて、留学生への説明会、日本語講座、受験対策講座のようなものを行っている。企業の

ニーズとして日本語は最低でもN2程度は必要で、N1になると、どんどん採用するといった中小企業は結構いる。留学生は優秀な中小企業の業務内容をよく知らないため、できれば低学年次にインターンシップに参加し、顔をつないでおくことも必要かと思っている。これまでの議論で拠点の話も出たが、もう少しこの輪を広げていくというのも一つかと思う。

また、日常生活の相談について。例えば、病気をしたり、少し困ったときに、日本語でのコミュニケーションがうまくいかないのが、困っている内容が伝わらないということがある。我々のような規模の大学では、留学生のためのスタッフを置くのは難しいので、例えば神戸市で規模の小さい大学の留学生対応についてサポートしていただけるような組織があると非常にありがたい。

(久元市長)

一種のヘルプデスクのようなイメージだろうか。少しそこは検討させていただきたい。

(神戸学院大学)

今後、各大学の努力で留学生がどんどん増えていくと、そういったサービスやスタッフが必要となってくる。その関連で、例えば神戸市で、留学生に対するインターンシップを実施していただいて、その中から、留学生の相談に対応するスタッフを雇用していただくようなシステムも少しお考えいただけるとありがたい。

(久元市長)

今、市役所でインターンシップの受入れをしているが、留学生は入れていないのか。

(谷口局長)

今回は留学生の方はいなかった。かなり応募者が多く、参加できなかった学生さんもたくさんいたため、今後、できるだけ数そのものを増やし、留学生についても考えたい。

(久元市長)

そこは今後検討させていただきたい。

(神戸芸術工科大学)

本学は留学生が100名ほどいるが、ほとんどがアジアの学生で、特に、この2～3年で多くなっている。本来、デザインはヨーロッパ、アメリカで学ぶものだと思っていたが、今の若者は、アジアの中で独自のデザインやアートを世界に発信したいという傾向があるのではと思っている。その中で、神戸という都市のブランド力は、彼らにとって魅力的で有効的であると感じている。

デザイン大学の中で独自性のあるカリキュラムとして、産官学民の連携プロジェクトを強化している。具体的には、2年に1回、K I I T Oで行われている「ちびっこうべ」への学生参加

や、播州織の西脇市との連携、舞多聞のプロジェクト、神戸地域の団地のリノベーションといった実践的な教育がある。独自性のあるカリキュラムをさらに推進するために、カリキュラムへの支援という視点があっても良いのではないかと私自身は思っている。

今回、平成31年度の神戸市採用試験で、デザインクリエイティブ枠を新設していただいたことは、本当にうれしく思っている。2008年、神戸市は、ユネスコ創造都市ネットワーク、デザイン都市と認定されたが、デザイン都市というイメージを、もっとアジア、世界に打ち出していれば、より神戸の魅力を発信できるのではないかと。

阪神・淡路大震災以来、神戸の人たちはやさしいコミュニティがあると思う。先ほどインターナショナルなホスピタリティという言葉があったが、まさしく、これからは学内だけでの教育が難しいと思う中で、地域の人と連携しながら、お互いの信頼性を高めて、今後、就職につなげていければ、神戸の独自性がますます発信できるのではないかと思っている。

(久元市長)

デザイン重視のまちは、宣言だけしても意味がないので、目に見える形でデザイン性の高いまちづくりを行っていききたい。

市役所の中には、既にいろんな形で外国人の方に入ってきてもらっているが、優秀な留学生の皆さんに来ていただくというのも一つの選択肢ではないかという気がしている。31年度から新設するデザインクリエイティブ枠について、外国人留学生の方に受けていただくというのは大変ウェルカムである。

(2) その他 意見交換

(久元市長)

留学生以外のテーマについて、特に産学官の連携、また、神戸の大学・短大・高専、専門学校も含めて、18歳人口が減少し続けている時代なので、ぜひたくさんの方々に入学してもらおうということが必要となってくる。そういった観点や、そのほかどんなことでもご発言いただきたい。

(甲南女子大学)

2040年の高等教育のグランドデザインが11月末に公表されるということで、2つ大きな流れがある。

1つは、大学の内部質保障。大学の成長、学習状態、アウトカム、これらを可視化し、それを支えるガバナンスも整える必要があるということ。もう1つは、大学を地域社会に位置づけること。国公立・私立含めて、地域社会の中に大学を、再度、位置づけるというところで、国公立を含めた大学間、産業界、および行政との連携などを議論すべきという提言になると思われる。

その中で、産官学で様々な取り組みができるような地域連携プラットフォーム（仮称）の設置をすすめることが議論されていると承知している。今、各大学のご意見を伺っていると、そ

れに非常に近いような発想でいろいろ動かれている。

明日、甲南大学さん、神戸薬科大学さん、甲南病院さん、甲南女子大学、東灘区、この5者で「東灘医療人材育成コンソーシアム」を結成する。それぞれが、医師、看護師、助産師、保健師、理学療法士、薬剤師、管理栄養士、医療行政、医療マネジメントといった、さまざまな資源をばらばらに持っていたので、これを結びつけ、実際に経験できるようなコンソーシアムをつくろうとなった。これは、それぞれの機関が持つ社会的ニーズから出発し、具体的に解決するためにつくり上げたコンソーシアムであり、それぞれの機関がメリットを享受していくというところが特色ではないか。

大学生と企業をマッチングし、企業からいただいた課題に対し学生がアイデアを提案する“Mラボ”事業で、今年、本学がグランプリを取った。この事業は、すばらしい企画で、成果を上げる一方で、関わった教員によると、企業は教える側、学生は学ぶ側に固定されているので、閉塞感を感じることもあるという。企業と、特に企業の若手の社員と学生が、共に学び、共に成長し、共に育つという意味で「共育システム」を作れないか考えているところだ。

大学コンソーシアムひょうご神戸で実施された「JOB with JOY」というワークショップや、質問だけで問題を深めていくアクションラーニングという手法を用いることで、学生はもちろん、企業からも、若手の社員の教育にもとても役立ったという意見が出たと聞いている。例えば神戸市で、趣旨に賛同していただける企業10社と手を挙げた大学とを結んでいただくようなことができれば、おもしろいものができる可能性があるし、成功すれば、神戸モデルのようなものができるのではないか。

双方がメリットを享受するようなプラットフォームをつくるのが、今、2040年に向けて、必要なことではないだろうか。

(神戸薬科大学)

これまでの議論を聴いていると、連携についても、多様性、産学官というキーワードで、留学生の問題ととても共通していると思う。

東灘医療人材育成コンソーシアムについて少し補足すると、甲南病院さん、六甲アイランド甲南病院さん、甲南女子大学さんは看護リハビリテーション学部と医療栄養学部を持っている。甲南大学さんはスポーツ健康科学センターのほか、いろんな文化系の学部も持っており、医療に関係する部分もあると思う。本学は、薬学部の単科大学だが、地域連携や生涯研修を看板にしている。そういったものが連携して、卒前だけではなく、卒後教育においても多職種で連携するということで、若い人材を育成するうえでは非常に効果的ではないかと思っている。私自身もこのコンソーシアムに期待を寄せているので、これが良いモデルとなって、神戸市全体に広がってほしいと願っている。

(甲南大学)

本学の今年度の新しい取り組みとして、朝日新聞社と共に“SDGsチャレンジ”を行った。神戸市をはじめ本学が連携している自治体、地元の高校生、本学の大学生と一緒に地域課題を

解決するワークショップを行ったことで、学生たちにとって深い学びがあった。

SDGsは国連が決めた一つの旗印であり、実はその中にさまざまな問題が入っている。留学生の受け入れに関しても、ベースにはダイバーシティ、文化の多様性ということがあるので、SDGsの様々な事柄につながってくる。我々の活動をまとめていくときに、神戸ブランドでまとめ、それをもっと展開していくときに、SDGsのようなグローバルに掲げられてることと神戸の取り組みはどう関連しているかを説明できれば、訴え方が変わってくるのではないかと。

(神戸常盤大学)

本学の取り組みとして、地域子育てに積極的に取り組む子育て総合支援施設について紹介したい。本学と長田の商店街、新長田の商店街、神戸市の連携の中で成り立っており、昨年度のブランディング事業に採択された。

10年近く前から、長田区の大正筋商店街近くで運営していた、乳幼児の子育て支援センターの機能を拡大し、乳幼児プラス学童を地域と一緒に育てていくというコンセプトの施設である。

運営をする中で様々な課題が見えてきたが、一番難しいのは、地域住民の皆さんにどう参加していただくかということだ。現在、地域で子育てをするというコンセプトで動いており、協力していただける地域の方々がいる。さらに、この中から大学の教育学部で幾つかの科目を受けていただいた方を“子育てチューター”として認定し、そのうえで、実際に、お母さん方や、お年寄りの方で、地域子育てに協力してくださる人材を育成していきたいと考えている。

(久元市長)

神戸常盤大学さんが、新長田にこういった総合支援施設をつくってくださったというのは、本当にありがたく思っている。地域住民の皆さんをどう巻き込むのかについて、長田区から何かコメントはありますか。

(長田区長)

子育てチューターの認定に関して、地域の中では、児童委員さんや子育てシニアサポーターという制度などがあるので、上手くつなげる仕組みができれば有効ではないかと思う。

(神戸親和女子大学)

本学では、来年度からも幼児教育のリカレント講座を三宮のセンタープラザで行う予定である。潜在保育士の方々に学び直しを提供して、不足している保育士としてまた力を発揮していただきたいと考えている。今後は、保育士資格を持っておられる方だけではなく、地域の方々にも開放し、より保育に関連のあるの方々にも学ぶ場を提供しつつ、地域で活躍していただくという形の講座に展開できないのか、少し見直してもいいのではと思っている。

潜在保育士の方に対するリカレント講座は行政でもされているが、非常に参加率が悪いため、子育て支援に興味あるの方々に対して、より広く情報提供する必要があると思っている。

また、国や北区の補助をいただきながら、プレママ・プレパパ教室を2年ほど前から始めて

いる。妊娠から出産までのお父さん、お母さんを支えていくことも、地域で子育てしていく安心感につながることから、孤立化し、偏った情報でしか将来の出産に向き合えない方々に対して、沐浴の体験や、助産師から産前・産後のお話を聞ける場などを提供している。産後うつの問題などにもつながるため、もっといろんな地域、各大学の方々と連携しながら広げていければ良い。また、神戸市からもサポートをいただけるとありがたい。

(久元市長)

潜在保育士の皆さんにいかに職場に復帰していただくのかということは非常に大事な話で、市としてパートの方に対して一時金を出すといったことも行っているが、実際に潜在保育士を発掘するためのリカレント教育をされて、ネックとして感じておられることはあるか。

(神戸親和女子大学)

非常にニーズが多岐にわたっており、私どもが提供しているものが潜在保育士の方々のニーズとずれてしまっている。また、人手不足の折、講座にお金をかけて通うというモチベーションが沸きにくい。そして、潜在保育士の方々の働き方の情報が十分に伝わっていないため、どう復帰すれば良いのかイメージしにくいということがあるのではないか。

(兵庫県専修学校各種学校連合会)

まずは私どもの立場としては、高等教育機関として専修学校もあるので、官学連携の枠組みの中において専修学校もよろしくお願ひしたい。

これまでの議論で、留学生の募集と、神戸市域の高等教育機関の地位向上のための発信に関して、問題点は同じであると感じたが、大事なのは発信するメッセージだと感じている。

留学生も含めた若い人たちが、その地域や地域の教育機関に求めているのは、そこへ行けば自分の思いがかなえられる、大学の研究機能や、その知によって、教育ノウハウによってブーストされるという期待感だろう。神戸市域の高等教育機関の強みを学部・学科もしくはその研究室ごとに分解して、それをまとめて、デザインしてみるという価値はあるのではないか。

また、神戸は海外から見て美しいまちであり、住みたい都市ランキングで、国内よりも海外の評価が高いまちなので、この都市生活の心地よさについてフォーカスをするのは良いかと思う。

(神戸薬科大学)

本学は昨年、住吉駅から5分のところに地域連携サテライトセンターを開設した。東灘区役所との共催で月1回健康サポートセミナーを行っているほか、2か月に1回、東灘薬剤師会との共催で「薬と健康」を行っている。健康サポートセミナーは、簡単な体操や、健康測定も行う。非常にリピーターが多く、80名の募集枠がほぼ埋まる。そういった生涯研修を行っている。

また、健康創造都市神戸推進会議の場は、関わっておられる企業の方と一緒にこれから事業ができるきっかけとなっており非常にありがたい取り組みである。

(神戸山手大学)

本学の観光学科では、神戸観光局と連携し、先日、サイクリングしながら街のスポットを回りポイント集めるというイベントを実施した。全国から150名ぐらいの方が参加され、学生がスポット探しや当日の運営などを行った。

また、本学は中央区にあり、南京町や、インド人の方々が住んでおられる地域が近いため、多様性があり、ちょうど我々の観光というフィールドと合致している。留学生が、春節祭のお手伝いをしたり、インド人の方々のコミュニティでフィールドワークをさせていただいたりしているため、とりたてて大上段に構えて地域連携をするのではなく、普通にフィールドワークの一環として、地域のイベント、活性化などに、学生や教員が関わり、地域のコミュニティに入るができていると思う。

(久元市長)

本日は、前半は留学生をめぐるさまざまな課題についてお話しいただいた。

各大学が取り組んでおられる教育内容や、神戸のまちの魅力も含めたトータルな情報発信をどうするか、また、日本人学生を含めた住居の問題について神戸市として検討させていただきたい。

昨年も議論になったが、大学、企業、行政も含む交流拠点の構想は、三宮を中心に具体化させていただきたいと思う。

地域連携が様々な形で広がり、ご協力をいただいているのは本当にありがたい。元町の南口がリニューアルされたが、これも大学の研究室の皆さんの提案によってデザインを出していただき、ほぼ忠実に整備をした。これも一つの例だ。

多くの駅の駅前が、デザイン都市とは言い難い状況である。今、学生の皆さんに実際にフィールドワークをしてもらい、駅毎にカルテをつくってもらっている。これを参考にして、駅前の再整備を計画的に実施していきたい。

神戸市の最近の取り組みを紹介すると、神戸在住の外国人の皆さんに、神戸のいろんなところを訪れていただいて、フェイスブックや、ツイッター、インスタグラムを使って、各国の言語で世界に発信をしていただく“神戸PRアンバサダー”というものがあるので、留学生の皆さんにももっと参加していただければと思う。

また、神戸市が管理している施設や道路の損傷や、公園の状況について、これまでは建設事務所に電話してもらっていたものを、市民の皆さんがスマホで撮って送信して報告できる“KOBEBOSU”という仕組みを今年度から試験的に始めた。このような施策も、特に学生の皆さんが地域に目を向けてもらうきっかけになると感じている。

今日は、大変有意義な意見交換をさせていただいた。ありがとうございました。